

十七世紀の台湾の神仏

田中克己

台湾の民間信仰については、清領時代のことは台湾の府県志のそれぞれに記されてをり、日本領時代の記載は伊能嘉矩『台湾文化志』第七篇「特殊の祀典及信仰」の条、連横『台湾通志』卷二「宗教志」などに記されるほか、管見でも増田福太郎氏『台湾本島人の宗教』(昭和十二年刊)、⁽¹⁾『台湾の宗教』(昭和十四年刊)、曾景来氏『台湾宗教と迷信陋習』(昭和十三年刊)などの專著がある。また戦後の台湾の信仰については劉枝萬氏の『台北市松山祈安建醮祭典』(民国五十六年刊)、王国瑤氏編『台北市歲時記』(民国五十七年刊)に付する「台湾地区神誕日程表」、吳瀛濤氏の『台湾民俗』(民国五十九年刊)の第二章「祭祀」の条などに

大体がしられ、日本人の調査では『大和文化』四四号(昭和四一年三月刊)に載せる丸川仁夫氏の「台湾の宗教事情」があり、また窪徳忠博士の『沖繩の習俗と信仰』(昭和四六年刊)にはくはしい調査がのせられてゐる。更に『台湾省通志』(民国六〇年刊)卷二「人民志宗教篇」第一一五冊は最近の概説である。

しかしこれらに先だつ十七世紀の台湾在住漢人の民間信仰に関しては、Dapper, O. の『大清すなはちシナ帝国の海岸ならびに国内におけるオランダ東印度会社の記念すべき事蹟 (Gedenkwaardig Bedryf der Nederlandsche Oost-Indische Maatschappye, op de Kuste en

in het Keizerrijk van Faising of Sina; ... Amsterdam, 1670)』⁽²¹⁾の四二ページより五一ページに、台湾に住んだ中国人の宗教についてのデーヴィッド・ライト David Wright⁽¹³⁾の報告をのせてある。これは台湾在住漢人の信仰についての最も古い記録であると信じられるが、読んでゆくうちにゴンサーレス・デ・メンドーサ Juan González de Mendoza の一五八五年刊『シナ大王国誌』⁽¹⁴⁾（矢沢利彦、長南実氏共訳、昭和四〇年刊）の記載と一致する部分があつて、ライト自身の見聞のみに拠るものでないことがわかつた。しかし十七世紀の台湾もしくは福建省沿海の民間信仰をしるものとして、価値があると考へるので以下に紹介して参考に資する。

ただ調べてゆくうち、オギルビー Ogilby, John の英訳したモンタヌス Montanus, Arnoldus の『アトラス・シネンシス Atlas Sinensis』⁽¹⁵⁾とものがあつて（一六七一年）、ダッペルと内容が同じだが、少くともこの書の主として扱つてゐるオランダ東インド会社の第二、第三次遣清使節に關しては、ダッペルの方が先ではないかと思ふので、ダッペルを主とし、オギルビーは参照してゆくことにしたい。

ライトによれば、漢人の信仰する天上の神は三十六位、地

上の神が三十六位で、合計七十二位であるが、この三十六や七十二といふ数字が全くシナ的である。すなはちこれは天地陰陽五行の成数で、『礼記』月令に一年を七十二候と分つのをはじめとし、『管子』卷三三地数にも古来、泰山、梁父に封禪した王を七十二家と数へるが、これは『史記』封禪書にもそのまま採られてゐる。同じく『史記』仲尼弟子伝にも、孔子の弟子を七十二人と数へる。道家もこの数を用ひ、その靈地を数へて七十二福地といふ。また『史記』秦始皇本紀に、秦の始皇帝が天下を三十六郡に分つたとあるのも、三十六が吉数だつたからであらう。『魏書』釈老志にも天地の間に三十六洞天があるといひ、この伝統は元明の世にも保たれ、『水滸伝』では天罡星を三十六、地煞星を七十二するの

も、全く同じ考へ方である。
さてライトが七十二位の筆頭に挙げるのは、天地海日月星辰の創造者であり、支配者であるタイ Ty である。タイは帝の音を探つたに相違ないが、ライトはつづけて、

「漢人はこれを全能の神と認め、最高者であり、第一の神としてゐる。この大いなる神に対し、人々は年に一度ではあるが、犠牲をそなへる。この犠牲は生きながら白檀材で焚いた豚であつて、その他の家畜を供へるのは

忌むべきことと信じられてゐるからである」といふ。

ライトのこの記述はシナの伝承どほりであつて、帝すなはち天への信仰は殷周以来のものである。森三樹三郎氏はこの天帝の信仰について、

「まづ天について見ると、この神は古く『帝』と呼ばれた。これは天に在る祖先の靈魂を指すもので、もともと人格神であつたことは殷墟の卜辞などからも察せられる。然るに後世になるに従つて次第に人格神的な要素を消失して、論語や老子、莊子などでは完全な理法的存在に化してしまつてゐる。その祭祀の方法などを見ても、犠牲などを供へず、柴を積んで燃して香気を送るのであるから、非人格的な神として取扱はれてゐることがわかる」

といつてゐる。いかにも儒教や老莊の説く天は非人格的な神となつてゐるが、天（帝）への信仰は人間界の君主を秦代以後は帝と称せしめると同時に、天子と唱へさせた。従つて天の祭祀は他の神々の祭祀と異つて、天子である皇帝の義務であつた。周はもとより秦を経て漢代となつても、天子の行ふ天の祭祀は『史記』天官書に「周官曰、冬至至、

祀天於南郊、迎長日之至」とあつて、周礼を継いで行はれ、その祭日は冬至、祭る場所は南郊だったといふ。これが清代まで行はれた天壇の祭祀の基本である。また最高神として人倫の基本を制するとして、天命、天運の語は知識人に唱へられたし、周圉民族にも影響を及ぼし、滿洲族出身の清朝の歴代も自らを *abkai han* 「天の子」と考へてゐた。

従つて福建や台湾では儒教的な天の祭祀は行はれず、ライトはたぶん知識人から最高神としての天帝のことをきいたのだと思はれる。

しかし道教にもとづく民間人の天への信仰はライトをして次のやうに記させる。即ち、

「第二の神ティーン・ショー・シヨク・コウン・シャンク・ティー Tien Sho Joch Koung Shanch Tee と呼ばれる。これは天の最高の座の第二位であり、支配者である。ティーン・ショーは『天の第二位』であり、シヨク・コウンとシャンク・ティーは『地の支配者』である」

といふのが、その説明で、Tien Sho は天相テイシヨに近いが、この天相の語の有無はわたしは浅学にして知らない。シヨク・コウン・シャンク・ティーは疑ひもなく道教の玉皇上

帝で、ライトのいふ如く天相？と二つに分れ、ともに「地の支配者」ではなく、道教の最高神、天地万物の支配者である。そのことをライトはつづけて、

「この神は万物をその勢力下に置き、さらにその領地内に三位の神靈 (Gees) を有してゐる。第一の神靈はヘオウン⁽¹⁸⁾ Heung と呼び、雨の支配者である。これは第六の神とみなされ、万物の元気を養ふため、雨を地上に与へる」

と記す。玉帝、玉皇、上帝とも呼ばれるが道教的には玉皇上帝または元始天尊が正しい呼び名であらう。いま台湾の民間では天公と呼ぶのが普遍的である。前にあげた吳瀛濤氏『台湾民俗』では、

「その玉皇上帝と称するのは天上の玉京に居るによる。その元始天尊と称するのは道教の用語で、万物元始の天尊と認めるのである。この神には神像がなく、ただ天公爐を祭り拝する。生誕は農曆の正月九日で、寺廟や家々ではみな祭りを行ひ、儀式は莊重である。伝へるには天地がいまだ分れず、陰陽混沌たるとき、一氣が神化したので、これぞ天地の精である。このとき天空は大きな笠のやうで、大羅と称し、数規を経て、はじめて地が成つ

た。天尊はそのとき玉京にをり、自生の大元玉女と氣を通じ精を結び、はじめて天皇氏、地皇氏、人皇氏を生んだ。そこで伏羲、神農、黄帝に至つて国土が開発された」

と玉皇上帝の定義をしてゐる。

このやうな神話的な定義のほか、玉皇はさらに人格を具へるとするのが、常民の感覺であつて、すでに唐の長孫無忌等撰の『隋書』卷三五「経籍志道経」には、

有元始天尊、生於太元之先……自云天尊、姓榮名靜信と、姓名さへとなへたことになつてゐる。その玉皇と称へられるのは唐代からであるが、すべての神靈をその下に從へるから、ライトのいふごとく、三位の神のみをその下に置いてゐるのではない。

三位の神靈のうち第二は、ライトによれば、

「テオウン Theung と呼ばれ、人間生活ならびに地上に生存し成長するあらゆるものに対し威力をもつてゐる」

といふ。このテオウンがヘオウン雨王について、天の第七神であるともいふ。テオウンは地皇⁽²¹⁾であるに相違ない。ついでライトは、

「第三の神靈であり、第八の神であるものは、ツイ・
シェン・ティー・オウン Tsui Zyen Tee Oung と呼ば
れ、海ならびに海中、海上にゐる万物の支配者である」と述べてゐる。これは明らかに水神帝王で、天皇、地皇とならび、また水仙尊王といふ。前掲『台湾民俗』にも水仙尊王の条に、

「夏の禹を祀る。夏の禹が治水に神があつたので、後世まつつて水神とし、また航海守護の神とした。水仙尊王を主祀として祀るほか、伍子胥、屈原、王勃、李白の四位をあはせて祀る。航海業者がこれを祀る」

とするしてゐる。伍子胥以下四人はみな河海に水死したとの伝説をもつものである。航海の神としては、後掲の媽祖があるが、ライトはこれを地祇として、天神には数へないのである。

以上のやうに天神の第六、第七、第八の三靈が中間に入つたが、天神の第三神としてライトが挙げるのはジョー・ティー Joh Tee で、第一神の帝と同じものはずである。しかし説明があつて、

「これまた地上の国王であつたが、極めて公平であつたので、そのため天に上げられたのである」

といふ。増田福太郎氏が『台湾の宗教』で紹介された『玉皇經』には、上古の光嚴妙樂国の王子で、長じて国王を輔佐し、国政を整へ人民を愛撫し、財宝を配与して貧窮の者を救ひ、慈悲を行つたが、国王崩後、位を大臣に譲り、道を修めたといふので、宋の真宗（在位九九七—一〇二二）の時、太上開元執符御歷含真体道昊天至尊玉皇大帝に封じられたといふ。玉皇上帝と同じものながら、ライトから別のものとして誤認されたのであらう。

ライトの第四の神クアンオウン Quanong はまぎれもなく觀音、すなはち觀世音菩薩 Avalokitesvara であるが、ライトは、

「これももとは死すべき地上の人であつた」

といつてゐる。これは今だに台湾で行はれてゐる伝説であつて、増田福太郎氏前掲書によれば、『觀音濟度本願真經』といふ道教の經によるものである。この經では東嶽大帝、城隍爺、土地公などの民間信仰の神々も名を現はしてゐるので、ライトは地祇に挙げるクアニム Quantem と別のものとしたのである。しかしこのやうに觀音が人間出身の神とするのは日本では見られず、反対に觀音が男子に化身するといふ説話となつてゐる点⁽²⁵⁾が、はなはだ興味がある。

ライトの第五神はジャモウン Jannung と呼ぶ神で、観音と同じく人間が「勇ましい事蹟のため天に上げられた」のだといふ。ジャモウンは閩王^{ギヤムオン}であらうが、これなら地獄の十王の一で、ライトは地祇の中でまた重出しジャムクン Jankoen と掲げてゐる。すなはち閩王の台湾民間の呼称「閩公^{ギム・コン}」で、これを天神とするのはまたライトの誤解である(追記参照)。

以上、最高神を帝とし、次を天相玉皇上帝、第三を上帝とし、これに次いで観音、閩王、雨王、地王、水神帝王と八位を設定したあと、ライトは次のやうに述べる。

「これら八神のほか、天の二十八人の貴族 (Raets Ja-eran) がある。これらはもと地上で偉大にして賢明な哲人であつたが、今や天上で諸星を治め歌ひながら行く」と。この二十八神は疑ひもなく黄道二十八宿であるが、これを擬人化するの明刊本『小説西遊記』ならびに『封神演義』で、後者は二十八宿の人としての姓名を明記してゐる。元明以来のこれらの小説の愛好者がライトにこの神神を、教へたのであらう。

ライトの伝へる天神は以上の三十二位で、次には地祇、地の神三十二位を伝へてゐる。すなはち、

「そのうへシナ人はさまざまの低い地祇を想定してゐる。これらはすべてその一年間に見た人間の犯した罪を報告するために、年々天上へ旅しそのゆるしを乞ふ」といひ、ついでこの地祇を列挙するが、その第一すなはち第三十七番目の神はポツ・ソウ Pot Sou と呼ばれ、子供を腕に抱いてゐる女の形に表はされてゐる、といふ。これは前述の觀世音菩薩^{ゴオウソウ}の重出だと思はれるが、ライトはつづけて、

「シナ人によれば、彼女は国王の娘で、すぐれた女子言者で、男を知ることなくして、カチ = Kachu と呼ばれる子供を産んだ。この子供は成人したとき、母親には劣つたが、甚だ大きな叡智と才能とを欲せずして所有した。この女神の前にはパウサツ Pausat と呼ばれる高齡の男が添へられてゐる」といひ、さらにつづけて、

「この半神女^{ヘンシナメ}は土民ではなくて、外国女と考へられてをり、処女マリアと同じものとも考へられ、老人の侍者はその夫ジョゼフと考へるものがある」

といふ。天主教は一五五二年広東省沖合の上川島で死んだサビエル F. Xavier の遺志をついで、一五五七年以来、

イエズス会によつて広東、福建に伝へられはじめたるから、この地祇の第一である女神はひよつとすればマリアと混同した観音であつたかもしれない。

第三十八番目の神、地祇の第二は、ライトによれば、明らかにクァニーム Quaniem すなはち観音の重出である。

ライトはこの神がマルコ・ポーロ Markus Paulus によつてはクァミナ Quamina、ゴンサーレス Joannes Gonsoles によつてはクィアニナ Quiania と呼ばれてゐるといひ、叙上の知識の根拠を明らかにしてゐるやうだが、マルコ・ポーロの『東方見聞録』にはわたしは寡見にして観音の記述は発見できない。ゴンサーレスは幸ひ矢沢利彦氏の翻訳で見るを得るとほり、以下にライトが述べるとほぼ同じ文を記してゐる。すなはち、

「ツォントン王の娘である。この王には娘が三人あり、そのうちの二人を結婚させた。ところがクァニーナを結婚させようとすると、彼女はこれをのぞまず、自分は純潔に一生をおくることを天に誓つたのだと答えた。父王は立腹して娘を僧院のようなところに押しこめ、水や薪を運ばせたり、畑の草を取らせたりした。チナ人たちはこの娘について、いろいろ愉快なことを語っている。た

とえば、猿どもが山から出て来て手助けをしてくれたとか、聖人たちが水を運んでくれたとか、鳥どもがくちばしで畑の草をむしってくれたとか、大きな獣どもが山から薪を運んでくれたとか、である。ところで父王はこれを知ると、娘がなにか呪術とか魔法とかを用いてそういうことをするのだと考え（括弧内略）、娘の住んでゐるところに火をつけるよう命じた。彼女は自分のことが原因で僧院が焼かれるのを見ると、髪の毛を留めていた銀のかんざしでのどを刺そうとした。すると突然、ものすごい風雨がやってきて、火を消してしまつた。彼女はそこを去つてある山にかくれ、そこでたいへんな苦行をおこない、敬虔な生活をおくつた。父王は娘にたいしておかした罪のために、癩病におかされ、蛆虫にむしばまれ、医師も施すすべがなかつた。そこで娘はこのことを霊の力で知ると、父王の病を治しにやってくることになつた。父王はこのことを知るやいなや、これまで自分がしてきたことに対して、はげしく後悔の態度をしめして許しを乞ひ、彼女をふしおがんだ。このような父の行爲を見るや、娘はそれをやめさせようとしたが、どうしてもできなかった。すると彼女の前にひとりの聖人の姿が

現われて、拝まれているのはその聖人で、彼女ではない
ということがわかった。もはや一刻の猶予もなしに、彼
女は庵に帰り、敬虔な一生をおえた。ひとびとは彼女を
大聖女としてあがめ、天上から赦しをあたえてくれるよ
うに祈る。この聖女が天国にあると信じているからであ
る。」

以上ながながとゴンサーレスの訳を引いたが、実はこれ
はゴンサーレスに先立つて中国を訪れたマルティン・デ・
ラーダ Martin de Rada (1533—78) が、一五七五年に書
いた福建旅行記に拠つてゐる由である。⁽²⁸⁾

ライトの所説といくらか違ひのあるのは、その年代的な
違ひのほか、ライトが自己の見聞を付け加へてゐるからで
あらう。すなはち、ライトによれば、このクアニームは、
中国の最初の皇帝クァンテコン Quantekong 黄帝公？よ
りずっと前、大洪水の直後に統治したピオウ・ト・ソウゴ
ン Biou 't Sougong 皇帝のむすめであるといひ、この王
の三人の娘の中の末であることは同じながら父王の名を異
にする。ピオウ・ト・ソウゴンの方は増田氏前掲書⁽²⁹⁾に引く
『観音濟度本願真經』に見える興林国の妙莊王（または廖
宗王）の三女、妙音、妙元、妙善（また廖善）の末娘が観

音であるといふので、この方があとまで辿れる。これに反
し訳書に見えないが、ライトはシナとタルタルとの間に長
城を造つたツォントン王といふゴンサーレスの見解がある
として、これを否定してゐる。なほライトによれば、尼寺
（僧院）に父王がつけた火を消したのはヘウオン Heuong
（前掲の兩王）であり、天罰として父王の受けたのは疫病
で、また体中を虫に食はれ、医師から見離されたとややく
はしく、父の死後、娘はラムハイ Lamhay（南海）にゆき
一生を終へたといふ。この方がいまも舟山列島の普陀山を
南海大士の道場とする伝承と合ふ。⁽³⁰⁾ またライトは観音の祭
は毎年三回であるが、このうち六月十八日のものが最大
で、街ではワヤン wajang（マライ語、芝居）が催される
といふ。この祭日の点も、現在の台湾で観音の祭日が農曆
六月十九日を主とするが、二月十九日、九月十九日、十一
月十九日にも行はれるといふのと対応してゐる。⁽³¹⁾

ライトが第三十九神として挙げてゐるのは、ニオマ Ni-
oma（娘媽）、またの名マツォウ Matzou 媽祖である。こ
れも女神で、華南よりはじまり各地の水辺に多く祀られる。
その由来については、ライトは、

「彼女はホウコン Houkong 省のコツォ Kotzo 市の生

れで、父はその副王であつた」

といふ。この記述は前掲のゴンサレスの書にもオチアム Ocliam 省クチ Cuchi の出身といふのと同じく誤りで、いまの福建省莆田県の湄洲嶼生れの女性とする伝承がどうしてか訛つたのである。ライトはつづけて、

「この娘媽は自分の生命力を残すため漁翁群島 Piskadores (または Vishes Eiland)、住民からは澎湖 Pehoe と呼ばれる島に住みに行つた。この島は赤道以北二三マイル (度が正しい―田中註)、台湾から二二マイルに位置してゐる。ここで彼女は自らの生涯を偉大な神聖性と憐れむべき状態とで終へた。その像は等身大に造られ、廟の中に立てられ、左右に二人の侍者がをり、二人とも武器を手にしてゐる。云々」

とする。澎湖の首邑馬公 (もと媽宮) はこの媽祖にちなむ名であり、そこといはず到るところの媽祖廟には千里眼、順風耳の二従神が見られる。

ライトはまた媽祖について、

「この娘媽の榮譽に捧げる最大の祝日は三月二十三日である。祭司が帝國のあらゆる土地からここへ来て、女神はこれを識り、祭祀を受け、このときこの島ならびに

いかなる島にも住む外国人は、やつて来て吉凶を念じなければならぬ (中略)。その榮譽ある出現と崇拜とは、シナの記録に次の如く記されてゐる。『コンボ Kompo といふ名の提督が、外国への艦隊をひきつれてゆき、澎湖島で逆風に会つて錨をおろされた。風が變つたと、提督は再び航行を命じたが、全艦隊の将士も錨が引き揚げられなかつた (中略)』

といふ。この提督は鄭和の遠征に随行した副太監の洪保に相違なく、永樂一八 (一四二〇) 年の第六次遠征と宣徳六 (一四三二) 年の第七次遠征の將軍たちの中にその名が見えてゐるが、澎湖島へ艦隊の一部が立ち寄つたことは他の史料には見えてゐない。事実とすれば馬公の媽祖廟の創建をここまで引き揚げ得るわけであらうが、少し怪しい。台湾では反対に提督鄭和が本島に立ち寄つた説話を存してゐるが、これも史実ではなからう。

ライトが第四十番目に挙げる神はシキア Sikiia (釈迦) である。これについても長い記述があるが、「シナ人の今も信する一宗教の開祖である」といひながら、その宗教が仏教であるときへいへないのは甚だ不完全だといはねばならない。

第四十一番目の神はアンヤア Ang-jia とごひ正月十一日に、家から家へ三人の僧によつてもち廻られ、さらに三人がそのあとに随ふといふ。この「裸体で半身だけに衣をつけ」、「顔がキリスト者のやうな」神は私見ではハヌタヌイア寒壇爺（または玄壇爺）に相違ない。鈴木清一郎氏『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』二九三ページには、

「正月十五日の夜は玄壇爺と称する寒さを厭ふ神を祭る奇風がある。玄壇爺の神像を竹椅子に安置して長さ二本の竹に縛し、裸体の壮漢四人にて昇ぎ之を動揺させながら、銅鑼を鳴らす者を先頭に、街中を練り廻る。各沿道の者等は銅鑼の音を聞いて爆竹を準備し置き其の近づいたのを見て、爆竹に火を点じ其の壮漢を目掛け之を擲つ。此の時他の二人の壮漢は傘と箒とを持ち之を払ふのである。云々」といふ。祭日といひ、随者六人といひ、ほぼライトの記事に合ふものと思ふ。

第四十二番目の神はトウテコン Toutekong と記される。この神は「白鬚をもつ老人の像」で竊盗や遊俠や賭博者の嫌ふ神であるといふ。郷村いたるところに祀られる土地公（福德正神）に相違ない。これも現在の民間伝説では

周代の公平な収税官だった張福德であるとされ、祭日は二月二日である。

次にライトの掲げるのはテイトウコン Teitokong と呼ばれ、第四十三番目の神で、

「生涯、勇壮な英雄であつて、左手にぬきみの剣を有つて表はされてゐる。敵のものとなつた國をとりかへしたその勇敢かつ大胆な行爲によつて天に上げられ、大衆から神としてあがめられてゐる」

といふのは、甚だ漠然としてをり、音でも現在の神々の中から比定できない。ただ偶然かもしれないが、次に第四十四番目としてライトが掲げる神との関係から、唐代の樂工雷海清が、田都元帥として、現在の台湾で信仰されてをり、同じく音楽や芝居の神ながら、安祿山の乱の時、亡霊として救ふため空中に現はれ、「田都」の二字をも表はしたといふことから、これではないかと思ひつきをしるしておく。⁽³⁸⁾

田都元帥が北管中の四平西皮派および南管樂派で祀るに對し、北管の福祿派が祀るのがライトの第四十四番目の神として掲げるシェー・コン Schee cong で、台湾語の西秦公（王爺）、すなはち梨園の創始者、唐の第六代皇帝玄宗

に相違ない。⁽³⁶⁾ ライトの記述は前掲の称号のほかは「劇場の発明者と考へられる」としか記してゐない。

第四十五番目の神もアムコン Ankong と呼ばれ、大いなる徳と敬神のためシナ人から得たと簡単に記される。これは庇公ヒシの音訳に相違ない。現在の伝承では保儀大夫とも呼ばれ、五月十二日が祭日で、蛇その他の害虫を退治する神であるが、これまた安史の乱で唐朝に忠義をつくし、雒陽を張巡とともに死守したが、城陥り国に殉じた許遠(37)だといふ。『隋唐演義』の民間に遺した功績たるや著しい。

第四十六番目の神としてライトが掲げるのはツワジョン Tswajong である。

「この神は生涯つよい男で巨人の形をもつてゐる。その太刀は九二ポンド(四〇キロ以上―田中註)以上あり、これを片手で扱ふ。その強さと尚武性についてはシナでは甚だ有名で、そのためシナ人は彼を神と認めてゐるのだ」

といふのが、この神についてのライトの説明である。

第四十七番目の神ホンゴウ Hongoe も「ほんとの巨人で力の強い腕前のある英雄で、その兜は百二十五ポンド(約六〇キロ―田中註)ある。その戦闘中の勇敢な行為によつ

て副王となつた。その死後シナ人は彼を神として祀り崇め

た」
といふのがライトの記述である。この二人の巨人の英雄については、わたしは『三国志演義』、『水滸伝』、『封神演義』の諸英雄を思ひうかべ、また現在の台湾で祀られる神々とも比べあはせたが、どれも見当がつかなかつた。たまたま大学院の修士の講義で松田精一郎氏から二王の金剛キムゴンではないかと示唆を受けた。さうだとすれば四十六番目も金剛で、密迹、那羅延がその梵訳である。

ライトの掲げる第四十八番目の神はハンジン Hanjin である。「シナ中で悟性の勇氣では比を見ない(閔帝公とソデジョン Sodjeong とを除き)。また良き先見と政策とで他の大勢力をもつたものより擢んでゐる。そのためシナ人は彼を尊敬し神としたのである」といふのが、この神の説明であるが、広東省の潮州に流され、いまも広東、福建に祀られる唐の詩人韓愈(退之)だとわたしは比定する。台湾でも正月二十二日に誕辰を祝はれるからである。⁽³⁸⁾

上述のソデジョンがライトの第四十九番目の神であつて、

「生涯はなほ賢い王で、国民のため大いなる政見と

愛情をもつてゐた。彼は閔帝公よりは劣るが、ハンジンより賢明とされてゐる」

といふ。この閔羽と韓退之との間に位する文神は文昌帝君(文曲星君)、梓潼星君などと称せられる神ではないかと思はれる。これは一方では北極の文昌宮なる星の神であるとも、四川省梓潼県に住んだ唐の人張亜(明史礼志によれば晋の人で張亜子)ともいふ由で、この神が文学の神として、読書人から祀られるといふ一点から、ソデジョンをこれに比定したく思ふ(吳瀛濤氏前掲書六一二ページ)。

第五十番目の神はシェンゴウン *Siengoesong* と呼ばれ、「生れつきはなはだ強い巨人で、勇敢な戦士で国土を敵から守つて功があつた」といふ。この神もわたしには誰と定めがたい。

第五十一番目は、ゴウマツインツイン *Goumatzingtzing* である。これも国に功績があつたほか、ライトによれば、「五眼をもち、一眼は普通の場所であり、もう二つはそのま上に、五番目は額のまん中に着いてゐて他の四眼の上にある。他の三眼が眠つてゐる時も、二眼はいつも開いてをり、このため天の看視役とされたのである」といふ。この五眼の神は仏教起原で、八部衆の一、五眼を有する緊那羅

Kinnara であると思はれるが、他の著しい特徴である馬頭人身、あるいは人頭馬身の点を記さないのが不審である。

第五十二番目は四眼の神ソウマノアオム *Soumanoam* で「二眼は頸にあり、二眼は額にある。額の二眼が眠つてゐる時、他の二つは開いてゐて、戦時にはいつも勝つ」といふのが神とされた理由であると、ライトは述べてゐる。この四眼の神は、現在の台湾で開路神または開路王と呼ばれ、周礼の方相氏より脱化した紂王の武臣であつたといふ神が、赤面四眼であるといふのに該当する。

第五十三番目の神はシェンズクン *Zienzucung* と呼ばれ、背は低く髪も少いが、智力に長けてゐて生れつきの紳士である。賽子や紙牌あそびをしたり飲酒する者の反対者であり嫌悪者であるといふ。この神は簡木桂氏の示教によれば富者の神陶朱公、すなはち茫蝨である。

第五十四番目の神は周知の閔帝で *Quantecung* 閔帝公と音訳されてゐる。ライトによればゴンサーレスその他はこれをヴィティー *Vite* と称してゐる由であるが、その他はラーダ手記のことで、なるほど *Vitey* と音訳されてゐるが、これはボクサー教授の比定することく、夏の始祖といはれる禹帝であらう。ライトによればこの閔帝は「他の

神のいづれよりまさつてシナ人に高く祀られあがめられてゐる」といふのはよいが、つづけて「シナの最初の皇帝とみなされる」といふのは、禹と混同したのであらう。しかしつづけて、

「生れつき戦争上手で逞しかつた点では、全シナに比類がない。体も強く王者としての苦しみにも強かつた。

その剣は九二ポンドあり、シナ尺で十尺である」

といふ点ではまた関羽のことらしい。ついで、

「服従させたのははじめ数省だつたが、のちには全シナ十五省をとつた」

といふ。十五省は明代の十五行省、すなはち京師、南京、山東、山西、河南、陝西、四川、江西、湖広、浙江、福建、広東、広西、雲南、貴州をいつてゐるので、禹貢とはもとより、関羽の業績とも違つてゐるが、明代のシナ人からの伝聞を証明してゐる。

ライトはさらに関帝について述べて、

「彼はシナ人がつけてゐる衣服の最初の発見者である」と考へられてゐる」

といふ。関帝は商業の神として認められてゐるから、そんな伝承もあつたのであらう。また関帝を製材、砲術、建築

術の発明者といつてゐるのも、諸葛孔明などと一つになつて軍神としての伝承をいつてゐるのであらう。

「シナではどの市でもその製品が見られ、街では他のもの（神）は住めないし、またその製品でなければならぬ。彼は村や町を分ち住めるやうにした。記録の伝へるところでは、この関帝公はただ一撃で、三、四千人を倒したといふ」

とライトはその勇武をたたへ、従者として、ツイーウツォン [Tzuitzong] すなはち周倉とその子で同時に戦死したとして知られるクワンピン [Quangpieng] 関平を挙げてゐる。この二柱の従神は現在いたるところの関帝廟で見られるのである。またその祀廟はとりわけ福建や台湾で盛んで、ライトのいふ如く、

「家にその像をかかげ、毎週供物をし、毎夜その像に好い油の燈をつけ」、「供物は二・五ポンドの豚肉、四分の三ポンドの鹿肉、煮た鶏、小麦粉の花の料理などから成つてゐる」

といふのもまあ事実近く、その他ライトのいふごとく老酒などの酒も供へられるし、

「三時にこれらが関帝公の像の前に供へられ、そのあ

と取り下げられるが、上げ下げともに大いなる恭々しきと頭と体を曲げて行はれる。供へた食へ物はそのあと供へた者どもに撰取される」

といふのも事実である。ライトはなほひきつづき、

「閩帝公の栄誉のため、どの町にも廟が建てられ、生きてゐる時どほり等身大の像が造られて立つてゐる。片側二フィートのところには、武器もちの周倉の像が剣をもつて立ち、「他の側には四歩はなれて従神閩平が立つてゐる」し、閩羽の愛馬アンベア Angpa (紅馬仔) といふ赤馬も廟にあるといふ。このあたりはラーダやメンドーサにも見えないので、ライトが実見した閩帝廟のことであらう。とりわけアンベアといふのは全く厦門—台湾語のままの音訳である。

ライトは次の第五十五番目の神からは、多くラーダ乃至メンドーサの記載を採つてゐる。すなはち第五十五番目の神は、

「チオンチユイ Chioenchui と呼ばれ、神靈 (Geest) で、禍から免れるために供物を捧げられる」

といふ。これがメンドーサのツィンソム Cinsom、ラーダの Cucion だ、秦の始皇帝のことだといふ。⁽²⁾

第五十六番の神は、

「コンソウ Kousou と呼ばれ、シナ人が八〇八年前に發明した印刷術の発見者とされる」

といふ。八〇八年まへはダッペルの書の出版に先立つ年代をいうのであるから、ほぼ唐末のことを指してゐるのであらう。中国の印刷が唐代にはじまつたことは、学界の定説であるが、このコンソウは誰のことかわたしにはわからない。ともかくライトはつづけて、

「シナ人はかれらがキリスト教の商人と貿易したので、キリスト教徒が印刷術を自分たちから貰つたと考へてゐる。このコンソウは玉座に立ち、まはりを数種類の民族がとりまき、それぞれ一冊の本をもつてゐるが、その中で最も近く立つてゐるのはドイツ人である。そのわけは、シナ人自身の証言に従へば、ドイツ人は他の民族よりも印刷では甚だ才能があり巧妙だからである」

といふ。これは西洋の最も古い印刷物がドイツ人グーテンベルク (一四〇〇頃—一四六八頃) の残した一四五三年版の四二行聖書だといふことと関係があるのだらう。

またちよつとライトの記述はメンドーサたちから離れて、その第五十七番目の神として挙げるのはテゴ—Tegoe

土牛トウウと呼ばれる地上の牡種牛 (aardsche bul) である。

第五十八番目がまた動物で、キエンケ Kienke すなはち鳥 (raven) もしくは「台所の泥棒 (Kieken dief)」である。ライトは、

「シナ人はこの二位の神に対し奇怪かつふしぎな迷信をもつてゐる。すなはち地下のテグーが地を両肩に載せてゐるので、キエンケが空から下りて来て、テグーの体を啄むと、テグーはキエンケを体から揺り落すためにやむを得ず身ぶるひし、このため地も揺れ動く。これをシナ人は地震の原因だと考へ、地震がはじまると、笑ひながら『いまやテグーがキエンケに啄まれてゐる』といふ」

と伝へてゐる。キエンケは雷ライコン公ツァウ鳥ニ (雷鳥) かとも思ふが、いまも台湾語に「土牛換肩トウウツァウキエン」といふ成語があつて、地下で地を支へてゐる牛が肩をかへる、すなはち「地震」といふことなのだが、肩をかへる理由となる鳥のことは、わたしにはこのライトが初見である。とまれこのためこの二種の動物が神とされるのだとライトはいふ。またライトはつづいて「イエズス会のマルティヌス・マルティニ Martinus Martini(45)のシナ史によれば、シナの地震は珍しいが、めつ

たに起らないでもない。シナの歴史家の示すところでは救世主の誕生に先立つ七三年に大地震が起り、数峰が崩れたが、これは人間に大麥な驚きと滅亡を起させた」といふ。西紀前七三年は漢の宣帝の本始元年で、なるほど『漢書』卷八宣帝紀には「夏四月庚午地震」と見える。

ライトはつづけて、

「はなはだ迷信深い傾向をもつ民族であるシナ人はこんな奇蹟を国家が衰頹すると固く信じ、これを天の怒りと脅かしの前兆とする」といふ。

「第五十九番目の神はルイコン Luikong (雷公)、すなはち雷の神である。ルイは雷で、公は支配者のことだからである。この神は頭が鷲のやうであり、手足は鷲の爪と翼とで表はされてゐる。またそれゆゑ雲間を切つて飛ぶ」とライトは記してゐる。

「この雷公が雷鳴を起さうとすると、彼は四雲の間に立つが、雲一つに一つつの太鼓があるが、これを二つの鉄の玄能で打ちつづけ、そこから雷が起る。だれかが雷に打たれると、雷公がこのものに腹を立てて、玄能で叩いたのだとシナ人はいふ。シナ人は雷をひどくこはが

つて雷が鳴ると卓と椅子の下に四つんばひになる。このため雷鳴のとき打たれないやう、雷公は神としてうやまはれる」

といふのが雷に関するライトの記述である。

第六十番目の神、いな女神は稲妻の女神であつて、いまも台湾では電婆(46)と呼ばれるが、ライトはその音訳を示さないで、

「彼女はシナ人によつて手に藁束をもつて描かれてをり、稲妻を閃めかす時にはこれを拡げるのだ」といふ。

第六十一番目の神は虹の神で、キューグコン *Kiengkong* とライトは表はすが、キェンコン *Kiengkong* の誤記(47)、虹公である。ライトはつづけて、「シナ人は彼にオムホ *Omho* (口好オンホキ) といふ渾名をつけてゐる。すなはち『好くない』のである。それゆゑ虹は好まれません、これが見えるところにある物や生えてゐるものがみなだめになる。それがたびたび出ないやうに崇め祀るのだ」

といふ。以上がライトの見聞であつて、ここでライトはまたゴンサーレスもしくはそのもとなつたラーダの手記にもどる。

すなはち第六十二番目の神はパンクン *Pankun* であるといふ。これはゴンサーレスのパンソンで、盤古に相違ない。

「シナの記録によればかれは地を完全にしたのであつて、地は神が造つたとき、形がなかつたが、盤古によつて完全にされたといはれる。

彼は書物では石工の使用する鉄の器具を使つて永年かかつて地を完全にした。彼はまた石切りをはじめた人でもあるので、石工、左官、瓦師によつて神としてあがめ祀られる」

といふのが、ライトの記述で、ゴンサーレスを書き改めてゐる。(47)

第六十三番目の神をライトはハウンコン *Houngkong* すなはち風公と呼び、

「風と精神 (*Geest*) の神である。記録にはおそろしい長い足と豚の刷子のやうにまつすぐに上つた羽をもつた大きな鳥として描かれてゐる。そこでシナ人によれば、その翼をはばたくと大風と暴風と驟雨とが生ずるといふ。それゆゑ漁夫、水夫、庭師など風を恐れるものに祈られる」

としるす。

第六十四番目の神はゴンサーレスに見えないが、南シナヤ中シナで祀られる屈原であつて、ライトはクォトクワン Khuotquan と写してゐるが、Khuotquan の誤りであらう。周知の通り『楚辞』の作者であるが、端午の節供の糝ちんせや扒菴ぱいじやう(競渡)の起原もこれにちなむとされてゐる。ライトはこの詩人についてはくはしく記し、

「シナの副王 (Onderkoning) で塩を發見し作つた最初の人で、この貴重な品物を天下に示した。も一人の副王は同時代に砂糖を發明し、これを塩より上に置いた。

この二人はそこで喧嘩し、その争の勝負を皇帝の良識にゆだねた。この二つの新發明に甚しく驚いた皇帝は、各人に見本をもつて来るやうに命じ、両方を味はつたあと、砂糖を塩の上に立つ最も美味なものとし、塩は悪く口の中であらうとした。クォトクワンはこの意見に反対して、塩はこれ以上に云々する価値のあるものは世界に現はれなかつたといひ、人間の生命を維持するために香と味とをすべての物に与へるといつた。皇帝はクォトクワンのこの反対に機嫌を悪くし、眼に見えるところから去ることを命じた。クォトクワンは絶望して出て行つ

て、川にはまって溺死した。反対に砂糖を造つたもう一人は、皇帝によつて甚だ高い地位に上げられた。イエズス会士マルタイン(48)によれば、この川は湖広省のスイアングン Siangin (湘源県) 市を流れるミーロ Mielo (汨羅) と呼ばれる川である。しかしこの屈原は一生涯はなはだ誠実で正直な代官で人民に氣に入られたが、そのため謀叛人に溺らされたのであるといふ。屈原が溺死した日は、ライトによれば (ここはダッペルの文章である)、五月五日であつた。この日の朝、記録によれば、激しい雨が降り出し、十二ヶ月止まなかつた。しかしこの期間中、乾燥できなかつたので、塩が造れず、そのため人民の三分の一が死に、塩一粒でも口に入れた者はたちまち活氣がついた。

皇帝はつひに代官からこの悲惨さを報告され、砂糖を造つたかのものを殺し、これについてももう語らないやうにとの嚴命を發し、遂にその名はこのため忘れられてしまつた。そこで忽ち雨が降りはじめ、皇帝は全国に屈原を神としてあがめるやう命令を發した。屈原の死んだ日は節供としてトゥオンウ Tuon (端午) と呼ばれ、家は舟の形をした薔薇と椰子の花環をぶら下げ、シナ人は

みな菜の束を頭につける。それから五日間は屈原の榮譽のため、誰も仕事をしない。二日目にはシナ劇すなはち見世物が演じられ、三日目にはさまざまの飾り立てて輝く竜の形をした舟数百隻が野菜を積み、衆人の声にはやしたてられて、この屈原に見せるため流れの上をゆく。どの舟にも太鼓が積まれてゐる。

屈原が発見されたといふ場所に来ると、革鞭を高く揚げ、長旒や旌旗を手にする。そのとき舟と群衆は強く太鼓とゴムとを叩き、声をかぎり叫ぶ『われわれは彼をみつけた』と。全シナであらゆる場所と流れとで催されるこの祭儀は以後三日つづくが、五日目には屈原を訪れるため海へと急ぐ。

われわれの意見では、シナ人が流れの上を舟でこのやうに揺り動かすのは、悪魔を払はうとするのだと思ふ。太鼓やゴムを叩くのは悪魔を打つのを示し、海へとゆくのは悪魔を追放するためであると思ふ。

この屈原はおよそ三千年前に死んだ。彼は死後二日目に発見され、十年間埋葬されず、死体はバルサムを塗られて残された。」

以上がライトもしくはダッペルの伝へる端午と屈原との

説話である。舟につみこまれる野菜とは菖蒲のことであり、扒竜（競渡）のこともほぼ南シナの慣習どほり写されてゐるが、塩と砂糖の話は他に見えないので、長々と引いた。

ライトの挙げる第六十五番目の神はまたシャント Shan-
とと呼ばれ、これまた戦闘好きな英雄で武器の扱ひが巧みだつたと至つて簡単に記されてゐる。わたしにはどの神のことか比定できない。

第六十六番目はナオン Naon だ。

「土牛神とともに地を支へるもので、臍から出てゐるその足もとに球をもつものと描かれる。土牛神が重荷すなはち地を持つのに疲れると、ナオン神は足で地を受取る。このため天に置かれ、祀られ崇められる。その結果として彼は怒りが起つても地を足から落さない」といふのがライトの所伝である。この地を支へるナオンもわたしには不明である。

第六十七番目の神はアツィオン Atzion で母リンティオン Linton から不思議な方法で作られた。野原をさまよつてゐるとき目を天に向けると、獅子の頭がそこにあるのが見え、これを見たため、男を知ることなくしてアツィオン

を孕んだ。この奇蹟によって彼はシナ人から神としてあがめられる、といふのである。アツィオンならびにリンティオンはメンドーサにも見えてをり、矢沢利彦氏はこれを母女登が竜に感じて生んだ神農氏の母子ではないかと疑つてをられる。⁴⁹⁾この伝承は唐の司馬貞の補つた『史記』の『三皇本紀』にもとづいてゐるやうである。

第六十八番目の神ウサ U^sa はまぎれもなく有巢氏で『韓非子』五蠹に見え、人民が少く禽獸の多い上古の世に、木を構へて巢を作ることを人間に教へたといふ神である。ライトは「その地上にゐた生涯、人間に食物を煮炊きすることを教へた。それまでシナ人は生の肉や魚を食べてゐたからである。彼はまた野獸から守るため木で小屋を作ることを教へ、裸体に衣類をつけることを教へた」と少しくはしく記してゐる。

第六十九番目の神をライトは「フンツィホイコン Hunt-zuhoykong」と呼ばれ火の発見者であるとみなされる」といひつづけこの記載も有巢氏と重複する点があり、

「人民に食物を焼くことと調理することを教へ、同時に売買を教へた」

とゞふ。この箇所は全くメンドーサの Huntzui すなはち

矢沢利彦氏が燧人氏かもしれないとされる神の箇所と同じで、これまた『韓非子』五蠹に載せる神である。

第七十番目の神はオツォウ Otzoe だ。

「その母ハウツィボン Hautzion によつて、アツィオンが母リンティオンから生れたと同じく、ふしぎな方法で産み出された。彼女が野原へゆくと、人間の足跡が見えたので、自分の足とどちらが大きいか比べようと足をのせた。さうするとすぐ大きな光が彼女を照らし、そのため彼女はこのオツォウを孕んだのである。彼はシナ人に農耕を伝へた最初のひとであり、楽器を發明したのもでもある」

といふのが、ライトの伝承で、メンドーサのオチェウティとはほ等しく、⁵⁰⁾矢沢教授は庖犧氏、すなはち伏羲氏かと疑つておいでである。従つてハウツィボンは華胥といふことになる。

第七十一番目の神はエゾロン Ezolon だ。

「医学の發明者、薬草の学者、占星術者であり易者で大魔術師 (Magician) である。彼は人間に大地を耕することをはじめて教へ、鋤と鍬とを造つた最初のものであつた。彼は七種の毒草を食べたが害を受けなかつた」

といふ。これがメンドーサの Esonlom であることは疑ひなく、神農氏のことをいふのであらう。

ライトが第七十二番目の神として挙げるのは、スカディンコン Skadingkong で、これはメンドーサに見えず、

「戦術を發明した最初のものである」

と簡単に説明するのみである。わたしには台湾のどの神がこれに当るか定められない。

ライトは以上各三十六位の天神地祇に付け加へて、さらに三位の地獄の鬼 (helsche geesten) を報告してゐるが、その第一はタイツォウクイ Ty Tsoequi すなはち「鬼の太子」(Prins van Duivel) であるといふ。これが『平妖伝』や『水滸伝』に見られる殷の李靖の子哪吒太子(中壇元帥、羅車太子)であることは疑ひない。

「シナの記録によれば、天使である。最高神が地上の人間の罪悪を見て、この太子鬼を呼びよせ、『人間の心が悪に傾いてゐるから、天には呼べない。下界にゆけ。汝のために地位、かれらのためには永遠の苛酷な牢を用意した。汝を地獄の長とするから、かれらを捕へて苦しめよ。かれらは永久に汝の傍らにとどまり、わしのもとには来ない。』」

以上が天帝の太子への命令であつたといふ。地獄は地蔵菩薩を主とする十王(後述の閻羅王もその一人である)の支配下にあるとする仏教的な觀念のほかに、もう一つ道教的な地獄が存在するのである。ライトによれば、

「シナ人の信するところでは、太子鬼は将来のことを知つてをり、罪人の罪を責め、どんな罪人が死ぬべきか知つてゐる。故に永遠に罰せられるために霊をとり出して地獄へもつてゆく」

といふ。仏教の地獄の転輪王の役目を果すわけである。その祭日はライトによれば七月十五日で、いろいろの供物がなされるといふ。

地獄の第二の評議官(Raeds-heer)はジャムコワン Jam-koen で、天神と複出してゐるが、こちらはまぢがひなく地獄の第五殿の閻羅王であらう。その管理するのは油鼎地獄で、「盗人、偽善者、団結して悪をなしたもの、誣告、拐帯、共謀して人の財産を横領、掠奪したもの」の油煎りの刑を施すところである。地獄の十殿の一であるが、この地獄を司るといふので十王の中から特に選出された理由はわたしには不明である。ただ日本でも地獄といへば舌を抜く閻魔が連想されるが、割舌地獄は第二殿の楚江王の管

するところである。ふりかへれば地獄の主宰者地藏菩薩をライトは挙げず、天界の神のところでも重出してゐるのである。『台湾省通志』巻二「人民志宗教篇第四冊」によれば、現存の台湾の寺廟中、地藏王菩薩を主神とするものは一一、閻羅王を主神とするものも台南州に一つ見られるが、地獄の他の九王の廟は見られない点、日本と揆を一にする。

ライトはさらに地獄の第三の評議官としてジャムトウイ Jantouwi の名をあげ、「これまた尊敬され祀られる」と簡単にしるしてゐる。地獄の他の九王（秦広王、楚江王、宋帝王、五官王、卞城王、泰山王、都市王、平等王、転輪王）以外に求めるとすれば、孟婆娘娘といふ女神でもあらうか。これはドレの前掲書三〇〇—三〇二ページにも出てをり、橋樑氏『道教と神話伝説』にも見えてゐて、十殿転輪王の下に描かれ、十殿から現世に放還される亡者どもに地獄での見聞を一切わすれさせ役目を荷つてゐる由である。

以上ライトの所記を中心として、おそらく十七世紀初の台湾在住漢人の信仰について略述したが、現在の台湾における道仏混交はすでにこのころよりもより見られ、史料的の価値もあるものと思はれる。ただ六十四の神仏のみに

限つた結果、他の現在も信仰される神仏を脱したかとも考へられるが、この六十四、すなはち天神三二位、地祇三二位といふ点にも中国的な基礎があり、かのサルマナザール George Palmanazar の『台湾誌』の記載の如く、全くの烏有でない点は信じてよい。

ライトの閩歴に劣らず、わたしにとつて不明なダッセル、またわたしが当てる神仏の比定については多くの誤謬があると思はれる。御教示がいただければ幸せである。

〔註〕

- (1) 台湾は清領になつてから府県志の編集が行はれ、『台湾府志』は康熙三四年高拱乾が創めて以来四次統修され、台湾、諸羅、鳳山、彰化、苗栗、恒春の諸県、噶嗎蘭（宜蘭）、澎湖の二庁もそれぞれ庁志が編まれてをり、最近、台湾銀行でその複製が出されて容易に見られるやうになつた。神仏のことはその典秩、壇廟などの箇所（52）に略記されてゐる。

- (2) 昭和四〇年、刀江書院復刻、中巻。
- (3) 大正九年、台北、台湾通史社發行。三冊。
- (4) 台南州衛生課發行。
- (5) 東京、養賢堂發行。

(6) 台北、台湾宗教研究会発行。

その他、片岡巖『台湾風俗志』(大正二三)、台湾日日新報社)の第十一集、鈴木清一郎『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』(昭和九、台湾日日新報社)の第一編『台湾民族性と一般信仰概念』、第三編『年中行事と例祭』など参考に価するものが多い。

(7) 台湾南港、中央研究院民族学研究所発行。

(8) 台湾市文献委員会発行。

(9) 台北、進学書局発行。

(10) 東京大学出版会発行。この力作は書名によつて看過してゐたが、検すると沖繩の民俗に与へた中国の信仰を知るため、御専門の書籍以外に台湾の实地調査報告が記され、参考になることが多かつた。

(11) 李汝和等修、台湾省文献委員会発行。

(12) 書名を完全に写すことは省くが、略したところにオランダ東印度会社の一六〇三、四年福建の靖南王耿精忠と総督李率泰への遣使、並びに一六〇六年の康熙帝への遣使のくはしい記述がのせられてゐるし、わたしがこの書を読んだのはその箇所のためである。残念なことにダッペルの履歴を明らかにしないが、東印度会社関係の史料によつたことには疑ひはない。

(13) ライトの略歴はウィリアム・キャムベル師の『オランダ

治下の台湾 Formosa under the Dutch』(一九〇三年、ロンドン刊)五五一ページに「このスコットランド人は一六二四年開拓布教師として到着したカンディウス Candius に少しおかれて台湾に居住した」とあるだけである。赤嵌城 (Port Provincia、台南市に遺址あり) をとりまく中国人の居住者を調査したこともあり得るわけである。

(14) 原書名については、訳書四一ページの解説を参照。

(15) 原名には "Being a Second Part of a Relation of Remarkable Passages in two Embassies from the East India Company of the United Provinces to the Viceroy Singlamong and General Taising Lipovi, and to Konechi, Emperor of China and East Tartary." 云云といふ長い補題がついてゐて、ダッペルの書と一致する。モンタヌスが『アトラス・ヤパネンシス Atlas Japonensis』(和田崑吉博士が『モンタヌス日本誌』として英訳本から大正一四年、丙午出版社から訳刊された)の好評に気をよくし、ダッペルの本を摸したのをオギルビーがまた直ちに英訳したかと私考するが、東洋文庫にも、キャムベルの台湾書誌『オランダ

治下の台湾』に附する)にも書誌学的記載を見ないので臆測にとどまる。ともあれ原文がオランダ語だったことからグツベル、オギルビーとも見える中国固有名詞の音訳はオランダ音とすべきかとも考へたが、ライトがスコットランド人だといふので、ほぼ英語よみにオランダ語よみをませ、これに福建音(主として『台日大辞典』昭和六年、台湾総督府刊を検した)を充てた。

(16) 『台日大辞典』で帝はテエ、メンドーサでは *tey*、オギルビーでは *ty*。

(17) 『中国古代神話』昭和四四年再版、大雅堂発行、三一九—三二〇ページ。

(18) 『台日大辞典』では雨はホオ、ウンは王オンであらう。

(19) 同書六一ページ。

(20) 『台日大辞典』では地はテエ、オウンはまた王オンであらう。

(21) 『台日大辞典』では地はまたチイである。

(22) 同書六七ページ。

(23) 前田氏『台湾の宗教』一一—一二ページ。

(24) 前田氏、同書二八ページ。

(25) 坂上田村麿(田村丸)は俊宗と名をかへ、観音の化身であることが室町時代の「たむらのさうし」に見えてゐる

由である(堀一郎博士『我が国民間信仰史の研究(一)』六六七—八ページ)。ただし観音が男神であるといふ伝承は台湾のみならず、中国本土でも見られず、ここにあるはれたやうに普通は女神とされてゐる(Dore, Henry, "Researches into Chinese Superstitions." 上海、一九二〇年版、第二部第五卷、一三四—一三三三ページ)。

(26) 前掲ドレの書第二部第六卷一三四ページ以下に見える諸像を験すると妙善(苗善ともしるす)は疑ひもなく女性であり、観音が韋陀太子ウエダウジを膝下に置く図が見られる(二—三二ページ対面第四〇図)し、また道教の天后聖母(後述の媽祖の異称)とも同じく、鬼子母神 *Haiti*とも混同される(同書二〇六—七ページ)といふが、ライトの記述は他に史料が見られない。

(27) 手近にあるマルコ・ポーロの訳註書である愛宕松男氏『東方見聞録』(平凡社、東洋文庫、昭和四五年、二冊)、青木一夫氏訳(昭和四四年、校倉書房、一〇版)をざっと検したがクアミナの項は見つからなかった。

(28) 前掲書一〇六ページ註。ただしラーダは観音の父王の名をトンソウ *Tongou* と写してあるとのことである。

(29) 『台湾の宗教』二八ページ。

(30) 普陀山を観音道場とする信仰は各処に見られるが、ドレ

前掲書同部同巻二一六ページにも記される。

(31) 吳瀛濤氏『台湾民俗』一八ページ。

(32) 中国の媽祖信仰については李猷璋博士の諸論文が詳しいが、台湾銀行経済研究室編の台湾文献叢刊本『天妃顯聖録』が清代までの史料をほぼ集めてゐて便利である。

(33) 鄭鶴聲編『鄭和遺事彙編』(台湾中華書局、民国五九年) 一一〇、一一二ページ。

(34) 周元文『重修台湾府志』(康熙五十一年、ただしいまは『台湾文献叢刊』、民国四九年刊本に拠る)巻九外志雜記には三保臺の項に

鳳山県地方有之。相伝明太監王三保植薑岡山上、至今尚有産者云云

と見える。三保は鄭和の字として有名である。

(35) 吳瀛濤氏前掲書七一ページ参照。

(36) 西桑王爺の祭典については各書に見えるが、現在も六月十一日が田都元帥誕生日、同月二十四日がこの神の誕生日として祭られる由である。王国瑤氏前掲書七三、一三五ページ参照。

(37) 吳瀛濤氏前掲書一五一六ページ。

(38) 王国瑤氏『台北市歲時記』一三〇ページ。

(39) 『台湾省通志』巻二人民志宗教篇第一冊三七ウ。

(40) ゴンサーレス『シナ大王国誌』一一八ページ註。

(41) 関帝廟は北シナ、中シナ、満洲(東北)のいたるところでも見られる。いはゆる武財神であつて、関平、周倉の陪祀も普及してゐる。関帝信仰の歴史については黄華節氏『関公的人格與神格』(台湾商務印書館、人人文庫、民国五七年二版)が簡にして要を得てゐる。

(42) ゴンサーレス前掲書一三七ページ。

(43) 中国印刷術についてはカーター T.F. Carter 著、グードリッチ L.C. Goodrich 訂、胡志偉氏訳註『中国印刷術的發明及其西伝』(台湾商務印書館、民国五七年)が甚だ簡明である——老来なんと簡明好みとなつたことよ——。これによれば印刷物の最古現存は神護景雲三(七七〇)年以前の印刷と証される法隆寺蔵の陀羅尼經であり、中国現存の最古のものは唐懿宗咸通九(八六八)年の金剛經(敦煌発見)であり、その發明は唐代中期であらうといふ。ここにいふ八〇八年前とは、唐末で乱を起した黄巢のことが訛つたのかもしれないとわたしは思ふ。

(44) 『台日大辞典』下四七七ページ。

(45) Martini, Martino (一六一四—一六一)。イタリアの生まれ、イエズス会士として来華、衛匡国と称する。ラテン文 *Sinicae historiae deus prima* (一六五八年刊)が

あり、ここにいふシナ史はこれを指す。他に De bello tartarico『韃靼戦記』も史料として有益である(方豪『中国天主教史人物伝』第二冊、一九七〇年香港公教真理学会発行一一九ページ)。

(46) 雷公、電婆は単独に廟祀されることがないが、畏れられることは他の神と異なる。

(47) ゴンサーレス前掲書一一五ページでは、「タイン(矢沢氏は天極と充てる)はパンソン(盤古)という男を無から創造し、またパンソナ(女媧氏と矢沢氏は比定)という女を創つたという」と簡単に記してゐる。

ライトの記述はたとへば梁の任昉の『述異記』上に見える、

昔盤古氏之死也、頭為四岳、目為日月、脂為江海、毛髮為草木

などといふ箇所によつた漢人の説話にもとづいてゐるのであらう。

(48) 註四五参照。

(49) ゴンサーレス前掲書一一六ページ註。

(50) 同書一一七ページ。

(51) 鈴木清一郎氏『台湾旧慣冠婚葬祭と年中行事』四七五—六ページ。

(52) 中野江漢編註、改造社、昭和二三年。二一三ページ。

(53) 岩生成一博士『渡臺西人肖像列伝』(『愛書』第一〇輯「台湾特輯号」昭和一三年四月)四二—四四ページ。

〔追記〕

ライトの記述で天神のジャモウンは印刷中にバラモン教の夜摩王(Yamarajan)で、地獄のジャムコウンと別のものと考へられてゐるのではないかと思つた。リグ・ヴェーダに出て来て、死者を天界に導くものとされてゐる点、閻魔とすこし性質を異にする。ライトはそのため天神に数へたのかと思ふ(高楠順次郎博士訳『印度古聖歌』大正一〇年、世界聖典全集刊行会。九〇—九一ページ)。